

2013年4月18日

東京大学理学部講義 『人類生態学』

担当：梅崎昌裕 (umezaki<AT>humeco.m.u-tokyo.ac.jp)

<参考書>

勝沼晴雄・鈴木継美「人類生態学ノート」東京大学出版会（1970年）

鈴木継美「人類生態学の方法」東京大学出版会（1980年）

鈴木継美・大塚柳太郎・柏崎浩「人類生態学」東京大学出版会（1990年）

◎大塚柳太郎ほか「人類生態学」東京大学出版会（2002年）

◎渡辺知保・梅崎昌裕ほか「人間の生態学」朝倉書店（2011年）

Problem Based Learning (PBL)

与えられた課題について、自分のわからないことを明らかにし、それを明らかにするために必要な勉強をおこなう。勉強の成果をグループで共有し、矛盾点を議論し、理解を深める。最終的には、与えられた課題についての広範な知識と、その課題を解決するための考え方を身につけることを目標にする。

<健康の問題を相対化して理解するための基礎：人類史の視点>

A. アフリカで進化した私たち新人は、およそ10万年前にアフリカを出て、地球上のほぼ全ての地域に拡散した。アフリカで進化したために、私たちは生理的には熱帯性の動物としての特徴をもっている。したがって、寒い地域で居住するためには、服あるいは家屋などの寒さから身を守る工夫が必要だった。

B. 新人は、アフリカとは異なる環境でも実施可能な生業をみつけだし、それを可能とする社会の仕組みをつくりだした。現在、地球上にくらす新人は、さまざまな顔かたち、体の大きさを持ち、ものの考え方、生活の規範、生活の様式など、いわゆる「文化」も多様である。このような生物的・文化的多様性は、過去10万年の間に形成されたものである。

C. 新人は、その誕生より狩猟採集によって食べ物を獲得していた。狩猟採集は、生態系のなかで生産される植物および動物を利用する生業であり、当時の新人は、他の動物とは食物連鎖によって結ばれていた。端的にいえば、新人の数が増えすぎると、食べ物が不足し、結果的に新人の数は抑制されていたであろう。新人の数は、生態系の人口支持力によって規定されていた。

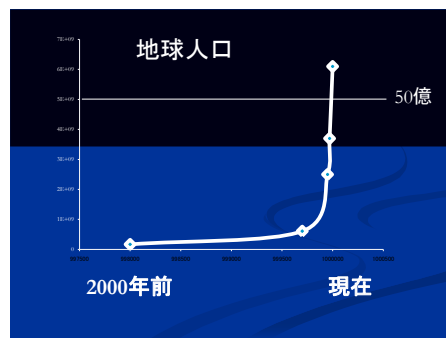
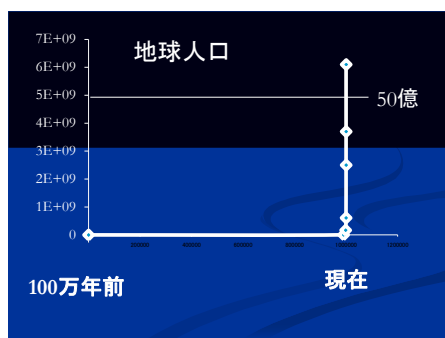
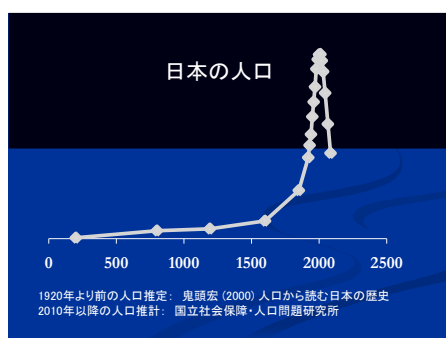
D. およそ1万年まえに、新人は農耕を発明した。そのことによって、本来の生態系の構造を改変し、自分にとって有用な植物や動物を育て、自らの力で人口支持力を増加させることができるようになった。農耕の起源地で栽培された作物は、それぞれの地域における野生種であり、たとえば、東南アジアでは根菜類・バナナ、地中海地方ではエンドウ、コムギ、オオムギ、アフリカからインドにかけてのサバンナではササゲ、シコクビエ、ヒョウタン、そして南米・中米ではジャガイモ・カボチャ・トウモロコシ・サツマイモなどが栽培化された。それらの栽培植物は、それぞれの地域の食文化を形成することになる。

E. 新人の一部は、都市をつくり、そこでは職業分化がすすんだ。そして、18世紀になると「産業革命」がおこり、太陽エネルギー以外のエネルギー源（主に化石燃料によるもの）を活用した近代科学技術（工学・農学・医学など日本の大学の学部名称となっているもの）が新人の生存に大きな意味をもつようになった。より多くの人が都市に暮らすようになり、人口は増加した。

F. 地球上に暮らしていた新人のなかには、早くから産業革命の恩恵を受けたグループがいた一方で（欧米、日本など）、そのタイミングが遅かったグループ、さらには最近まで産業革命の影響を受けなかったグループもいた。結果的に、過去数百年の間に、地球上の地域間の経済格差はかつてないほど拡大した。

G. 1950年代以降、いわゆる国際援助が活発になり、「もっている国」から「もたない国」への経済資源あるいは技術の移転がはじまった。この国際援助においては、対象とする国における生存システムの全体的な変化を視野に入れるというよりも、援助をする側のコンテキストに依存したパーツごとの援助がなされたために、時として、援助者が意図しない結末を招くこともあった。たとえば、ワクチン接種の推奨によって子どもの死亡率は大きく減少したが、その結果、その集団の人口はかつてないスピードで増加し、食糧不足など別の問題の原因となった。国際援助の対象となってきた国は、「発展途上国」と分類される。

H. 一方、産業革命の恩恵を早くから享受したほとんどの国々（現在のほとんどの先進国がこれに該当する）では、少子高齢化がすすんでいる。出生力は置き換え水準を大きく下回り、人口に占める被扶養者（高齢者+子ども）の割合は増加している。人口は減少すると予想されており、これだけ大規模で継続的な人口減少は、新人が始めて経験することである。



(参考) 人類生態学研究の歴史

- トカラ列島調査 (1960年代)
人口動態の長期変動
- パプアニューギニア低地調査 (1970年、1980~1990年代、2005年)
個体群レベルの適応システム、微量元素栄養、マラリア
- ボリビア日本人移住者調査 (1970年代~1980年代)
新しい環境への行動適応・生物適応
- インドネシア・西ジャワ調査 (1980年代~現在)
人口稠密地域における生活戦略・カドミニウム汚染、農薬の健康影響
- ボリビア先住民調査 (1980年代)
高地適応、エネルギー代謝
- パプアニューギニア全域調査 (1990年代~現在)
近代化の健康影響、社会変化、低タンパク適応
- バングラデシュヒ素汚染地域の研究 (1990年代~現在)
ヒ素曝露の健康影響、交絡要因
- 中国・海南島調査 (2000年~現在)
少数民族の健康問題、政策への対応
- ソロモン諸島調査 (2000年~現在)
マラリア・社会変化・エコツアーリズム
- 南太平洋調査 (トンガ、パラオ) (2000年~現在)
デング熱・肥満・MIRAB経済
- 空間情報科学の医学への応用調査 (2000年~現在)
パプアニューギニア、上海、東京、インドネシア、バングラデシュ他
- 低タンパク適応研究 (パプアニューギニア) (2010年~現在)